



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヤクーチアの考古学：旧石器時代前期から中世後期までの文化の興隆
Author(s)	ジャコノフ, V. M.; 垣内, あと//訳; 高瀬, 克範//付記 他
Citation	北方人文研究, 13, 175-193
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77254
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_14_Diakonov.pdf



ヤクーチアの考古学 —旧石器時代前期から中世後期までの文化の興隆—

V. M. ジャコノフ
(訳・垣内あと、付記・高瀬克範・福田正宏)

1. ヤクーチアの概況

ヤクーチアはロシア最大の地方行政区であるが、人口は100万人に満たない。面積は島嶼部を除いて300万km²、サハ共和国内だけで3時間の時差があり、北部はラプチェフ海、東シベリア海が自然の要害となり、海岸線は4500km、面積の40%以上が北極圏域に入る（スライド1）。タイガ、ステップ、森林ツンドラ、ツンドラ（山岳ツンドラを含む）と地形・気候が変化に富んでおり、地質条件の多様さゆえに自然環境も資源も多彩である。国土の大半が山岳・高原地帯で、面積の3分の2以上を占め、平地は残りの3分の1に過ぎない。最高峰はチェルスカヴォ山脈にあるパベータ峰（3003m）である。また、ペルホヤンスキ山脈、スタノボイ山脈もある。

2. 旧石器時代

ヤクーチアに古代人が住み始めたのは、旧石器時代前期であることが考古学研究で分かっている。ヤクーチアで確認されている最古の文化は、レナ川中流域に広がったジリング文化である。主要遺跡のジリングユリャフ遺跡は、ヤクーツク市から流域沿いに140kmさかのぼったレナ川右岸にある。いわゆるタバギン河岸段丘（高さ105～130m）の堆積土は、様々な時代の文化遺物を包含しており（スライド2）、そのうち最古のものがジリング文化の遺物である。

遺跡を調査したYu. A. モチャノフの復元によると、古代のレナ川中流域には、珪岩の丸石や玉石が堆積してできた中州に、古代の住居や作業所があった。文化層を調べてみると、ジリング文化人の遺物は通常、石器を製作する大きな台石の周りに集中していた。台石のないところで出土した石器もある。作業所・住居は円形、楕円形である。ジリングユリャフでは、51の石器集中があり、見つかった石器類は5110点。もっとも特徴的なのは、珪岩の破片や丸石で作った大形の打製石器、石核、削片で作った刃器類である。

ジリング文化に典型的な石器は、様々な形状のチョッパーである（スライド3）。楕円形の玉石を木口から2～3回剥離して作った。剥離した鋭角の部分を刃部とし、反対側を握り手として使用した。チョッパーは旧石器時代の汎用石器で、木を切り、物を切り分けたり、掘具として使うなど多くの作業に用いた。チョッパーを製作する際に、円礫や小礫を割ってできる偶発的な形状の珪岩の破片や剥片も、道具製作のために使用した。

ジリング文化人の石器はチョッパーの他、様々な形状の大小のスクレーパー、刃物、穿孔具等で、素材はほとんど珪岩であり、ほかの岩石の使用例は稀である。石器類は打撃剥離で偶然できた形だが、刃部の加工方法は一定しており、おおまかな分類ができる。モチャノフ・フェドセーエワ（2013、

361頁、図1)によると、レナ川中流ではジリング文化遺跡が約20か所にある。

モチャノフは、ジリング文化に最も近い遺物はアフリカ・オルドバイ時代の石器であるとする。遺物が見つかったジリングユリャフの文化遺物層の様態は一樣ではなく、地層が複雑なことも合わせて、遺物層の形成時期について様々な議論を呼んでいる。モチャノフは、ジリング文化はレナ川の沖積土にあり、地質調査で少なくとも200～300万年の年代が出たとする。すると、ジリング文化の年代はオルドバイ渓谷の遺物群より古くなり、人類の起源の地とされてきたアフリカより早くヒトがシベリアに現れた可能性すらあることになる。この「人類の非熱帯起源説」を支持するのがモチャノフである。

ジリングユリャフ遺跡の遺物層については、第三機関が年代調査を行い、結果が1997年米国研究者によって英科学誌サイエンスに発表された(Waters et al. 1997)。それによると、熱ルミネッセンス線量計分析によって、ジリングユリャフ遺跡の文化遺物層は26～37万年前であることが分かった。数十万年前という、当初の推定の100万年単位からするとかなり見劣りするが、すでに定着した、人類の祖先の移動のイメージに見直しを迫ることにかわりない。このような古い遺跡が北東アジアで見つかったことで、旧石器時代前期にすでにこの地域に人が移り住み、ベーリング海、北米大陸へと移動していくさまがリアリティーをもって浮かび上がってくるのである。

ヤクーチア旧石器時代の次の段階はアラライ文化で、1996年にオリョークミンスク市で見つかったアシュール伝統ムスティエ型の遺物を根拠にモチャノフが区分した。レナ川流域の標高100～160mの河岸段丘の表土剥ぎ取り部や斜面(80m)から、表採資料(珪岩製斧状石器)を集めた。モチャノフはこの文化を旧石器時代とし、180～15万年前と仮定したが、年代の根拠となる裏付けはない。スライド4にシンプルな大形石核を示した。石核は打撃剥離でできた剥離面がそのまま残っているほか、道具としても使用された。

旧石器時代といえば、オリョークミンスク郊外の高さ55mの単独丘でA.シャラボリンが発見したチンガラフ遺跡や、ソスノーヴィ・ポール遺跡もあてはまる。両遺跡はマラヤ・ムンク川流域の文化と一体をなすとされている。チンガラフ遺跡の遺物は、珪岩、玄武岩、安山岩、石英製の石器140点におよぶ。器種は原始的な石核、削片、チョッパー、スクレーパーである(スライド5)。石器の一部は風化で劣化している。チョッピングツール、削片石器、独特の三面斧(ジョージアのツァルジー斧に似る)も出土している。シャラボリンは、石器の器種構成や製作技術から、この遺跡をアシュール文化後期に分類した。ヤクーチア旧石器時代にアシュール文化期が存在するというモチャノフの学説がどれだけ正しいか、今後の考古学調査で明らかにされてゆくだらう。

ヤクーチアの旧石器時代中期を代表するのは、通常中部旧石器時代とされるキジルシル文化である。モチャノフは、「器種や製作技術からみて、旧石器時代中期の前半に相当するだろう。地質的には、カザンツェフ(リス・ビュルム)期にあたり、絶対年代で15万～7万年であろう」とする。モチャノフとフェドセーエフはそれぞれの論文で、キジルシル文化を15万～3万5000年前としている。

1989年、ヤクーツク大学のニコライ・チェロスとアレクサンドル・キリリンは、ビリュイ川左岸のチミルジャフ・ハヤで珪岩製の尖頭器と原始的な搔器を発見した(スライド6)。2000年、フェドセーエフはチミルジャフ・ハヤ近辺のビリュイ川下流ムングハリマ1、2遺跡を発掘した(スライド7)。この文化の遺物は、多数の両面加工の槍先(尖頭器)とナイフである。両面加工石器は、板状の珪岩を剥離してできた剥片を加工した石器である。また珪岩製の石斧、斧状石器、斧状ナイフ、背付きナイフ、スクレーパーが見つかった。

キジルシル文化に独特の石器は、プリズム型・円盤型と不定形の石核である。河川敷や河岸段丘の露頭で見つかった獣骨は、マンモス、ケブカサイ、バイソン、ステノンゼブラ、トナカイなどで、遺跡の年代とも矛盾しない。ムングハリマ1遺跡の年代は、更新世中期であることが堆積土の測定で確定している。河岸沖積層出土遺物は熱ルミネッセンス線量計で60万±15万年(RTL 957)、上層は15万±3万8000(RTL 958)である。マンモスの肩甲骨片は古代地表面から1.5m掘り下げた第3層で発見され、4万1310年以上とのデータが得られている。

キジルシル文化は、北アジア一円の旧石器時代後期遺跡や、アメリカのパレオインディアン文化に相当するジুক্তタイ文化の原型となる文化で、その発見と研究は、北米大陸へ人類が移動を始めた当初の諸問題を考えるうえで大きな意義を持つ。

キジルシル文化とジুক্তタイ文化を担った人々の横顔はわからない。北東アジアへの大規模な人類移動の痕跡は、ビリユイ川上流のウスチ・チルクオで確認されている。モチャノフとフェドセエフは旧石器時代後期を特にチルクオ文化として区分して、その年代を5万～3万5000年前としている。遺物の中で優勢なのは、珪岩製の大型石刃で、多くは二次加工がある(スライド8)。つまり、これらの石器は、刃物として単独で用いられた。同じく二次加工面を持つ大形の剥片もある。

チルクオ文化にはまた、レナ川中流のオリョークミンスクで出土した珪岩・頁岩製の石核もある。新人が東シベリア北極圏高緯度帯へ進出したことは、サンクトペテルブルクの考古学者V.ピトゥリコが区分したヤナ文化が示している。この文化の分布域の境界ははっきりしないが、ヤナ・インジギルカ平原は含まれる。ピトゥリコは、カルギン間氷期(47000～27000年前)の遺跡をヤナ文化遺跡であるとした。

主な遺跡としては、ヤナ川右岸のカザーチエ村上流にあるヤナ遺跡(またはヤナ RHS)がある。ここでミハイル・ダシツェレンがケブカサイの角製の槍先を発見した。2001年には同所でピトゥリコが調査に着手、毎年発掘を行っている。ヤナ遺跡は河岸段丘(標高18m)に位置し、堆積土中層(7～7.5m)に長さ2.5kmにわたって広がっている。炭素年代測定が数10回行われ、27000～28500年前とされる。

ヤナ遺跡では石器、角・牙器、道具類が出土した。石器製作は剥片を片面加工したものが多いが、一部は両面加工である。石器では搔器、尖頭器、彫器、骨角器は槍先が多い。マンモスの牙は、大型獣を狩るときに使う長い槍の製作に用いた。更新世のツンドラステップ地帯では木材が常に不足していたので、槍のほぼ唯一の素材がマンモスの牙であった。遺物包含層は深さ6～7mの永久凍土中にあり、実用的な道具類や骨角器の他に、マンモスの牙製の玉が数千個、首飾り状に連なった管状のウサギ骨製、又は穴をあけた歯で作った垂飾や威信財(装身・装飾具)が出土している。ピトゥリコは、ヤナ文化人が装身具(玉、頭にかけるリング状の髪飾り、プレスレット)を威信財として使った可能性があるとしている。

更新世末期までのサルタン期にヤクーチアで広がりを見せたのは、旧石器時代後期のジুক্তタイ文化で、モチャノフによれば35000年から10500年前である。1967年、アルダン川のジুক্তタイ洞窟で、モチャノフが初めて旧石器時代後期の遺跡を発見。遺物の分析から、当時は初となるジুক্তタイ旧石器文化が区分された。他のジুক্তタイ遺跡で出土した遺物を分析した結果、北アジアの旧石器時代に両面石器製作が行われていたことが分かった。モチャノフは、北アジアの旧石器時代後期に、両面加工石器(ジুক্তタイ文化)と片面加工石器(マリチン・アフォンツ文化)の二つの石器製作文化が併存したと考える。前述のチルクオ文化は後者に属する。

ジুক্তタイ文化遺跡では、精緻な成形技術で作られた両面加工ナイフと槍(又は投槍)の穂先が

出土している。いずれも両面加工石器である(スライド9)。素材は、硬度が高く叩いて割ると鋭い刃先が出来上がる珪岩系の岩石が使われた。石器は猟や獲物の解体、マンモスの牙・骨角器製作、木工に使われた。ナイフや尖頭器以外に、ジュクタイ人は搔器、削器、楔、骨角器として尖頭器(槍先)、短剣、錐、針入れ、針、銚先等を作った。

この時期に楔形細石刃核を利用して細石刃製作が始まった(スライド10)。楔形細石刃核は古くから知られており、ゴビ砂漠で初めて出土したのでゴビ石器といわれた。この石核は、北アジア、ヤクーチアを含む北・北東アジアの広大な領域に普及した。ジュクタイ文化では、1961年に日本の旧石器時代について吉崎昌一が提唱した、湧別技法という石器製作技術が広まっていた。炭素年代測定によって、西ベーリング地方へ人類が最も早く移動した時期が分かっているが、ここにヤナ文化が一枚噛んでいる。遺物の年代は、約3万年前に人類がヤナ・インジギルカ平原と沿海地方低地を北緯71度まで北上したことを示しているのである。

更新世末期はユーラシア大陸からベーリング海にかけて地続きであり、ここを通過して狩猟民が初めて北米大陸に渡ったのは、遅くとも24000年前である。後氷期(16000~11000年前)に気候がやや温暖となったころ、人類はさらに拡散した。チュコトカ地方も含む西ベーリング地方は、アジア考古文化の担い手が北米大陸に進出する唯一の通り道であった。このような動きは更新世末期から確認され、ベーリング地方の細石刃文化の故地であるジュクタイ文化の存在と切っても切り離せない。

3. 中石器時代

ヤクーチアの中石器時代を代表するのは、スムナギン文化(紀元前10500~6200年)である。モチャノフは、「中石器時代」の存在に異を唱え、この時代は旧石器時代末期であるとする。スムナギン文化圏は、現在のヤクーチア地方よりずっと広く、近隣地域も包含する。スムナギン遺跡は、西はタイミル地方から東はベーリング海峡沿岸、北は北極海沿岸、南はオホーツク海沿岸とレナ川流域まで広がっている。

スムナギン文化の石器は、植刃器、ナイフ、搔器や刃部がくぼむスクレイパー、端が斜めに折り取られた石刃、角や側面に彫刀面をもうけた彫器、錐、楔形石器、プリズム形・円錐形・楔形の石刃核からとられた石刃を素材とする平行四辺形の石器がある(スライド11)。

スムナギン文化の石器の85~95%は石刃素材である。剥片からは主に搔器が作られた。スクレイパーといえは大形の石刃から作られることが多いものの、スムナギン文化では剥片からも製作された。残りの5~15%は石斧や手斧といった大形の切断具で、木材等素材の切断や加工に使われた。

世界最北の遺跡の一つとして、東シベリア海ジョホバ島が挙げられる(8000~7800年前)。遺跡の調査で新たな知見が得られ、ヤクーチアの中石器時代のイメージがより細部まで分かるようになった。中石器時代は、トナカイ・ヘラジカ猟などに弓矢を使うなど新たな猟法が編み出され、漁労も大きな役割を果たすようになった。

ジュホバ遺跡の獣骨を調べると、住人の1年の生業を再現することができた。1年はトナカイとホッキョクグマの猟期に大別される。ジュホバ遺跡では、ホッキョクグマの頭骨が数多く見つかり、猟でつけられたとみられる傷が多く残っている。大抵の頭骨はメスカ子熊のもので、冬眠で穴にこもり比較的捕獲しやすい時期に集中して捕えていたことが分かる。

ジュホバ文化人は、イヌの繁殖を行っていた。しかも、輸送犬(そりイヌ)、猟犬を区別して交配

していたようである。ジュホバ遺跡では、犬ぞりの滑走部材も出土したことで、同遺跡では少なくとも 8000 年前にそりイヌ繁殖が行われていたことを示し、移動生活をおくる集団の機動性を高めていた。

4. 新石器時代

ヤクーチアでは独特の新石器文化が次々に現れ、一定の発展を見せた。前期はスィアラフ文化、中期はベリカチ文化、後期はウミヤフタフ文化がそれぞれ代表である。ヤクーチアの青銅器時代は、ウラハン・セレゲニヤフ文化、ウスチ・ミリ文化、スグンナフ文化の少なくとも 3 つの文化が生まれた。

新石器時代前期に当たるのがスィアラフ文化で、紀元前 5～4 千年紀半ばにかけて 1380 年にわたって栄えた。スィアラフ文化の遺跡は、レナ川、アルダン川、オリョークマ川、ビリュイ川、アナバル川、オレニョーク川、インジギルカ川、ヤナ川、コリマ川流域とタイミル地方、チュコトカ地方に分布する。現在約 150 の遺跡が知られており、うち 16 か所の層位は攪乱がなく、新石器時代前期の遺物だけが集中する。

スィアラフ文化の標識遺物は、網目文土器である（スライド 12）。スィアラフ文化の土器は、放物線形または半割卵殻形土器（訳者註—日本語文献では聞いたことがないので尖底鉢形土器としたい）であったとみられる。網目文土器の特徴は、円形・楕円形の透かし孔帯が施文されている点である。また、貼りつけ式の隆帯も多く、隆帯を横切る刻文が付く場合もある。

スィアラフ人の主な生業は狩猟で、漁労も大きなウエートを占めていた。新石器時代前期に人類は磨製石器の製作を覚え、磨製の手斧やナイフが出土している。戦闘用の弓矢も急速に広がり、木葉形の石鏃が数多く見つかった。最も種類が多いのは薄い石刃で（75%）、そこから大小の彫器、石錐、植刃器、石鏃、搔器を作った（スライド 13）。他は、玉石や板状の石で作った。中石器時代となり、新石器時代前期は、両面加工石器が主流となった。骨角器も広く普及した。

獣骨からみて、スィアラフ人は狩猟で特にヘラジカを好んで捕獲した。また、岩壁画で最もよく用いられるモチーフとなっている（スライド 14）。ヘラジカの表現は、ヤクーチアの新石器時代前期の岩絵で数量的に圧倒しており、しかも最も目立つところに描かれている。新石器時代前期の岩絵はヘラジカ、トナカイに続いて、クマ、イヌ、オオカミなどがあるが、繁殖期の雄雌や死体を描いたものもある。概してスィアラフ人の絵は、動物叙事詩と名付けていいだろう。絵柄はリアリティーに富み、動物は躍動感あふれ、静止画はまれである。

紀元前 5000 年ごろ、ヤクーチアと周辺では、新石器時代中期に当たるベリカチ文化が広がった。ベリカチ文化は紀元前 3000 年紀末まで続いた。印象深いのはその分布域で、ヤクーチアのほか、アムール下流、サハリン、タイミル地方、チュコトカ西部まで広がっている。ベリカチ文化圏にはチュコト半島東部も入り、カムチャッカも影響圏に入っていた。現在まで 300 以上の遺跡が知られている。

ベリカチ文化の代表的な標識遺物は、縄目文土器である（スライド 15）。口唇部には透かし孔帯があり、断面半円の貼り付け隆帯を伴う場合もある。型押し文の横走・斜走帯を組み合わせた意匠性の高い構図の施文を持つ場合もある。器形は半割卵殻形、放物線状の主に尖底鉢型土器である。ベリカチ文化の縄目文土器は、まれに条痕文を伴う場合がある。

ベリカチ遺跡の石核は、ブリズム形が多く、円錐形は少ない。約 50% の石器は石刃から作られる（スライド 16）。砥石、多機能石器、搔器や、非対称の返しのついた石鏃、植刃器、局部磨製の手斧、

耳付き斧、ドリル、搔器などが出土している。

ベリカチ文化では墓地も発掘されている。トゥオイハイン墓地はビリュイ川上流、ジキムジン墓地はオリョークマ川、ラジンスク墓地はコリマ川下流、ウオルビン墓地、オンニョス墓地、ハイルガ墓地はアムガ川流域にある。多くは炭素年代測定で分析済みである。アガニョク墓地の遺物は日本で測定してもらったところ、4個の良質のデータが得られた。2点は人骨、ほかの2点は獣骨を測定して得たデータである。人骨データの方が200年ほど古く、リザーバー効果をうけているとみられる。

ベリカチ文化の岩壁画は、アニミズム的なモチーフが多く、特にヘラジカ猟の要素が強い。人物画も多くなる。人も動物も太い線で輪郭を描くか、線内を色で塗りつぶすなど、多様な技法が用いられる。人は主に運動をしている状態で描かれ、指は3本に描くのが特徴的である(スライド17)。

新石器時代末期にあたるのがウミヤフタフ文化で、紀元前3～2千年紀に渡り約2000年続いた。ウミヤフタフ文化はヤクーチア以外にタイミル地方の一部、チュコトカ、ザバイカル・バイカル北部まで及んでいた。現在約400遺跡・遺構が知られ、集落、墓地、単独墓、岩絵と種類も多彩である。集落遺跡の30以上は、撓乱のない層位で確認され、他文化の遺物混入はない。

ウラハン・セレゲニヤフ遺跡は多層遺跡の中でも特別で、ウミヤフタフ文化に相当する文化層が9層もある。ウミヤフタフ文化の土器は、格子目(ワッフル)文や条痕文を幾重にも重ねた複合施文や、ナデミガキ文が特徴で、胎土は動物の毛、草本、針葉樹の葉等有機物を混和材に使っている(スライド18)。混和材はほかにも、砂、小石、シャモット、砂礫、砕いた珪岩がある。施文では必ず透かし孔帯がある。芸術性の高い施文としては、ジグザグ文、三角形、交差沈線波形文といった幾何学的な意匠がある。

ウミヤフタフ文化の石器は、精緻で洗練された技法と、一定の形を厳密に踏襲している製作法が特徴である(スライド19)。多様な岩石から、石鏃、尖頭器、搔器、彫器や植刃器、ナイフ、砥石、斧、手斧等あらゆるものを作った。ウミヤフタフ人は、打撃剥離、二次加工、研磨、穿孔、切断、石核からの石刃剥離など石器製作技術のすべてに通じていた。石器製作はこの時期に最盛期となったといつてよい。

ウミヤフタフ文化の墓地は、チュチュル・ムラン墓地、ジリングユリヤフ墓地、パマスキン墓地の3か所が知られているほか、単独墓が数か所にある。キョルジュゲン墓地では骨製小札の盾、角製小札の鎧をまとった武人が埋葬されており、石器時代末期のヤクーチア住民の社会構造と軍事を復元できた(スライド20)。

新石器時代後期の岩壁画は、人物画が優勢となり、動物画は退潮となる(スライド21)。人物画は立像、踊りなど動きを表すもの、手を広げた動作が描かれる。抽象的な要素が一定程度占めるようになり、彩色は赤土を様々な濃淡グラデーションで用いた。最も関心を引くのが、さすまた状・円錐状の被り物を頂く人物の画で、シャーマンを描いたとされる。宗教的な発想が生まれていたのは、祈るように腕を上げている人物や、シャーマンの祈祷に合わせて踊る小人物の絵が示している。具象画がなくなったわけではないが、抽象画が多くなっていく。

5. 青銅器時代

新石器時代が終焉して以降、ヤクーチアの文化は様々な形で発達してゆく。南部、南東部、西部は、青銅器時代にウラハン・セゲレンニヤフ文化が広がり、紀元前19～14世紀を中心に実質紀元前二千年紀を通して存続した。

遺跡はアルダン川、オリョークマ川、ビリュイ川、レナ川中流にある。ウラハン・セレゲニヤフ文化人は、紀元前三千年紀末～紀元前二千年紀前半にかけてアンガリヤ川沿岸、エニセイ川、レナ川上流、ビチマヤ地域からヤクーチア南東部や南西部に移ってきたとみられる。

ウラハン・セゲレンニヤフ文化の標識となるのは、真珠文（突瘤文）、刺突文、型押文のある土器である。このような土器は、レナ川中流、オリョークマ川、アルダン川、ビリュイ川で出土した。ウラハン・セゲレンニヤフ文化は、同名の多層遺跡（オリョークマ川、トッコ川流域）にちなんで名づけられた。同遺跡では青銅器時代となる第7層から、独特の土器が他文化の遺物混入がない状態で出土している。復元した格子目（ワッフル）文土器は頸部がはっきりし、口縁部に真珠文が見える。型押文、刺突文を施し円舞する抽象人物を描いている（スライド22）。

ウラハン・セゲレンニヤフ文化の石器は、新石器時代の特徴を受け継ぎ、製作技術も母体とされるウミヤフタフ文化から引き継いでいるようである。一方、ウラハン・セゲレンニヤフ遺跡における鋳型の発見は、青銅器製作の伝統が生まれていたことを示す。

紀元前二千年紀中～紀元前千年紀にかけて、ヤクーチアから北極圏域にかけてウスチ・ミリ文化が広がった。アルダン川、オリョークマ川、レナ川中流、ビリュイ川に単層遺跡がある。またレナ川下流、ヤナ川上流、インジギルカ川下流、コリマ川下流にもわずかながらある。ヤクーチア以外に、ウスチ・ミリ型の土器が、エニセイ川、タイミル地方、バイカル・トランスバイカル、アムール地方やオホーツク海沿岸にも出土している。

ウスチ・ミリ文化の主な標識遺物は、前後の文化とはかなりかけ離れた特徴を持つ土器群で、胴部に貼り付け隆帯のあるナデミガキ土器である。スライド23に示す土器は特異な土器で、貼り付け式、せり上げ式の隆帯が口縁部下部に施文されている。隆帯の数は12本を超えることもあり、断面は三角形に近く、楕円形に近いものもまれにある。

複数の横走隆帯が2本の斜走・縦走隆帯と接する場合も散見される。口縁部は通常、斜刻文や刺突文となる。胴部は円形透かし孔の横走帯を持つ場合が多く、明らかに新石器時代の土器製作伝統を受け継いでいる。土器の黒灰色、黒色は、密封窯を使って還元炎で焼き上げる高温焼成の技術を用いたことを示す。つまり、密閉された焼成穴や窯で約900～1000度で焼成された。高温還元炎焼成は、中国では新石器時代から知られる。

ウスチ・ミリ文化では、青銅器が製作されたが、石器と骨角器のウエートがまだまだ大きかった。石器は新石器時代後期とほぼ同じだが、石刃素材の石器が徐々に姿を消したため、多様性が失われつつあった。最も数が多いのは、石鏃、搔器、植刃器、砥石である。石鏃の形は三角形に近く、両側を丁寧に磨き、搔器は削片を使って作った。矩形、半月形のナイフ、楔形石器、剥片素材の石鏃、彫器、粉碎器、圧搾器、プリズム・円錐形の石核、剥片、石刃といった副産物がある。

ヤクーチアに青銅器時代の墓地は少ない。ウスチ・ミリ文化人の葬制が火葬であったためである。ネレゲル墓地（ヤクーチア中部）は、炭素年代測定で同定された数少ない青銅器時代の墓地である。

ウスチ・ミリ文化で金属器が使われた痕跡は乏しい。その数少ない資料がアルダン川のウスチ・ミリ1遺跡出土の曲がり刀子である。青銅器は貴重品で、何度も改鑄して再利用された。鉄器時代前期の銅・青銅製品は全部合わせても数十点にすぎず、多くは移入品であろう。青銅器時代のものは一部で、残りは鉄器時代のものである（スライド24）。

紀元前1000年～紀元後4世紀にかけて、青銅器製作をしていたウミヤフタフ人の系譜を引くスグンナフ文化人が、ヤクーチア北極圏域やあるいはタイミル・チュコトカ地方まで住み続けていた可能性がある。スグンナフ（続ウミヤフタフ）文化は、1400年ほど存続したとみられる。北極圏の

「疑似」ウミヤフタフ文化遺物を炭素測定して判明した。

スグナフ文化の圏界ははっきりわかっていないが、北東アジア北極圏の奥まである程度は浸透していたことが分かっている。スグナフ文化人は、ウスチ・ミリ文化人の一部のグループと共存した可能性があるものの、交流がどの程度盛んだったかはよくわかっていない。

スグナフ文化（続ウミヤフタフ文化）を区分する根拠となったのは、青銅器製作の明確な痕跡と炭素年代測定データである。ウミヤフタフ文化人の子孫は、ヤクーチア北極圏域に残り、同中部の鉄器・青銅器文化人と併存する形となった。鋳型、埴埴、銅滓、インゴット、青銅器片が多く出土しているので、すでに青銅器製造技術は受け入れつつ、独自の物質・精神文化も守り続けていた（スライド25）。

スグナフ文化の石器と土器は、ウミヤフタフ文化と変わりなく、これらの遺物を特に区別する根拠に乏しい。ステパン・エベルストフは、インジギルカ川下流のスグナフ遺跡、デニスカ・ユリュイエテ遺跡、ベラヤ・ガラ遺跡を発見し調査したが、東シベリア北極圏のウミヤフタフ文化と続ウミヤフタフ文化の区分に頭を痛めた。当初エベルストフは、インジギルカ川流域の遺跡はウミヤフタフ文化の晩期としていたが、現在はスグナフ文化とする意見に傾いている。

ヤクーチアの岩壁画が、青銅器時代のどの文化に属するかを見定めるのは難しい。青銅器時代に精神文化が大きく変容したのは、岩壁画のモチーフに現れている。先行文化と比較して、青銅器時代は、さすまた状または放射型の被り物を頂く人物の表現がより抽象的になっている。岩絵の研究者によると、これらの人物はシャーマンであるという。シャーマンの祈禱や礼拝は、獵の安全と成功を祈って行われていた。新石器時代後期に現れた神話的なモチーフはさらに複雑になり、シャーマニズムの教義が発展し、霊界と俗界を仲介するシャーマン信仰が定着したことを表す。

このように、岩壁画のモチーフは自然物信仰から神格信仰への移行が見られるが、伝統的な狩獵のモチーフは青銅器時代にも受け継がれた。この時期の岩絵は、ヘラジカ、トナカイ等の狩獵対象獣や鳥だが、リアリティーを追求せず、静的な表現にとどまる。抽象的な構図が多くなるのは、青銅器の普及とともに、物質文化のみならず精神生活も変わってきたことを示す（スライド26）。

6. 鉄器時代（前8・7世紀～後5世紀）、中世前期（後6～12世紀）

ヤクーチアの前期鉄器時代は、現在紀元前7世紀～紀元後5世紀とされており、前期は2600～2200年前（較正年代）である。後期も炭素年代測定で確定しているが、前期鉄器時代と中世前期の区分がはっきりしておらず、現在紀元後4～12世紀とされるヤクーチア中世の時代区分はあくまでも仮のものである。

ヤクーチア鉄器時代前期の主要遺物は土器である。表面ナデ調整、格子目文、条痕文に型押文が同時に使われる。刺突文、爪形文も混じる。一部の土器には1本または2本の貼り付け隆帯があり、多くは楕円の刺突文で区切られる。胎土には砂、小石、シャモットといった混和材が使われる。

石器は、製作技術がシンプルになり、種類が大幅に減少する。鉄器の普及につれて石器が後退したことを示している。骨角器は多彩で、鏃とその中柄、刀剣、鎧、弓筈等がある。鉄器は、刀子、鉄鏃、針、釣針、鎧小札等がある。前期鉄器時代黎明期に属するのは、スキタイの流れを汲む嵌入式青銅鏃である。

ウクラン、センジエリン、ホト・トゥラーフ遺跡で偶然見つかった青銅製の刀剣もこの時期の可能性が有る。またこの時代（紀元前7～紀元前4世紀）にあたるのが、ボリショイ・パトム、ムリヤ、ニユルバ遺跡出土の大形の青銅手斧で、シベリアでは前期タガル期にあたる。ヤクーチアで大

形青銅器が鑄造されていたことを示すのは、ヤクーツク市州立病院遺跡から出土した組み合わせ式の鑄型で、1940年に青銅器製作用具とともにオクラドニコフが発見した。

ヤクーチア前期鉄器時代の墓の副葬品は数・種類ともに豊富で、葬制も特異であった（スライド27）。例えば、ジュプシン墓地では、ヤクーチア前期鉄器時代の葬制では初めての発見となる屈葬墓が見つかった。それまでに見つかったのは全て仰臥葬であった。

ヤクーチアの人々の世界観が前期石器時代に大きく変容したことを示すのは岩壁画である。鉄器時代には画法・様式において、記号化が進んだ。人物画は抽象的で、胴は三角形と頭は頂点を上にした三角形、足はくの字型に描く場合が多いが、とりわけシャーマンは具象的に描かれる場合もある。動物らしき表現もある。絵文字（象形文字）の萌芽もみられる。前期鉄器時代の岩絵は、あらゆる形象が描かれ、これらの記号は、実存する生き物や自然物を極限まで記号化した表現といえる（スライド28）。

7. 中世後期（13～16世紀）

前期鉄器時代後半とされていた時期を中世前期とするべきではないかという議論は、以前からあったが、現在、その判断の妥当性を証明する複数の証拠が見つかった。1987年、トッコ川でヤクーツク大学の調査隊が、ウラハン・セゲレンニャフ多層遺跡を発見、第4～3層に鉄器時代の遺物があることを確認した。発掘作業の結果、ヤクーチアではチュルク系民族の影響が紀元後6世紀に早くもみられることが分かった。

ウラハン・セゲレンニャフ遺跡のチュルク系遺物は、複合弓の弭、鎧小札、双頭の馬をかたどった骨製品、鉄製刀子、五銖銭がある。第5層で見つかった骨製の複合弓部材は、弓束の完形品と破片、弓筈である。骨製弓筈のある弓の原型は、匈奴が開発したとされる。しかし、スキタイ系の弓が骨製の弓筈の原型（匈奴の弓を含む）となったという意見がより正しいようである。特に、第5層から出土した骨片は、双頭の馬の抽象表現が最も印象深い。同様の遺物は、紀元後1～5世紀のタシテイク文化でよく見つかるので、ステップの遊牧文化がヤクーチアにも広がったことを示す。

ウラハン・セゲレンニャフ遺跡から出土した、チュルク系の影響、あるいはチュルク系民族そのものの存在をうかがわせる遺物の一つに、牛の骨がある（4B層出土。深さ50～55cm）。牡牛またはバイソンの足根骨とされる。第3層出土の五銖銭は、581年隋を建国した文帝（楊堅）の貨幣改革で最後に鑄造されたときのもので、中原以外では装身具、護符、縫い付け式ワッペンや青銅器の材料となった。同じく第3層からは、片刃刀子が見つかったが、シベリアでは紀元後9～10世紀に同様の刀子が見つかる。

8. 中世後期

ヤクーチアの中世後期にあたるのはクルナタフ前期ヤクート文化（紀元後13～16世紀）である。この間、サハ・ヤクート人が形成された。同時期にあたるのが、ヤクーチア中部、ビリュイ川下流の集落・墓地遺跡である。これらの中に、アトラソフ1墓地がある。ヤクーチア葬制で唯一の座位屈葬で、被葬者は男性で、頭部が樺の皮でぐるぐるに巻かれていることから、傷を保護し、治療を行ったのであろうと考えられる（スライド29）。

被葬者の男性は、20～25歳で死亡したとみられる。樺の皮をとると、左側頭骨と下顎に数多くの故意による傷痕があった。傷の特徴からみて、凶器は、長い柄と、まっすぐあるいはかるく湾曲する17.5cm以上の刃部を持つことがわかっている。頭部だけで3つの割創があり、2つが頭部への

致命傷、1つが下顎を直撃していた。推定される凶器は、当時この地域に普及していたバタスあるいはパティアとよばれる武器の特徴と一致する。副葬品は少なく、弓矢と矢筒、樺皮の天幕の生地片、鉄鎌5個、骨鎌3個（1個は残欠遺物）、骨製弓筈、鉄環（あるいは矢筒鉄枠）であった（スライド30）。これらの副葬品の中にはクルンアタフ文化、17～18世紀のヤクート文化に比定できる遺物がある。

頭骨から男性の顔の復元を試みた。人類学的には現代プリヤート人やモンゴル人に近く、プリヤートまたはモンゴル系移民がオモゴイ・バイ（ヤクート人の伝説的父祖）に率いられてレナ川に達したという伝承の信ぴょう性が高まった。

この時代の墓がもう一つ、2013年にヤクーツクで見つかった。40～45歳の男性被葬者がカラマツの木棺に収められていた。頭骨に致命傷となったバタスまたはパティアによる大きな割創がある（アトラソフ1墓地と同じ）。セルゲリャフ墓地に埋葬された人物は、副葬品が鎧、馬具、弓矢、矢筒、轡、バックル、面繫などの武装具しかないことから、騎馬兵だったことが分かる（スライド31）。また、体中に数々の傷跡が残り、頭部の致命傷からも武人であったことを傍証するが、ヤクート人が形成され、文化をはぐくみつつあった当時の軍事紛争がいかに激しかったかがわかる。馬が基本的な移動手段だったことは、骨盤からもうかがえる。いわゆる騎兵骨盤と言われる変形があり、頸椎の軟骨形成、脊椎関節症、腰椎のシュモール結節が見られた。骨に多くの傷があるのは、戦闘が日常茶飯事だった当時の暮らしを想起させる。致命傷は、楔状の武器による頭部刺創だったとみられる。

頭骨の分析により、被葬者に近いのは、ユーロポイドとモンゴロイドの要素が併存する南シベリアの人々である（スライド32）。当該例に限っては、モンゴロイドの要素が強い。12～14世紀の南アンガル地方や、レナ川上流のウスチ・タリキン文化の葬制と似ており、被葬者の頭骨の特徴から、セルゲリャフ墓地は、「チュルク系」のサハ人のものである。チュルク系サハ人は、ヤクート人の伝説の父祖エレイ・ボオトゥルと比定される。

17世紀の墓はもう一つある。被葬者は30～40歳の女性で、茶毘に付されて木棺に安置されている。木棺中の頭部付近にはクツワ、足元には鎧が置かれていた。頭部の下にはまた、複数の鉄製刀子と、樺皮の鞘に収められた刀子1本が置かれていた。胸にはそろばん玉状の棗玉のついた疑問符形の耳飾りと、大小の青銅・鉄製留め金を縫い付けた入れ子胸当てが見つかった。

頭部には、被り物の一部である、羽飾りを挿す半球形の台が残っていた。また、帽子の頂部につける対の装飾留め金も見つかった。刀子は、骨製柄にはめ込んで刃部を固定しており、ヤクートのものではない。入れ子胸当ては、金属の小札を縫い付けてできており、シベリアで16～18世紀に広く見られたものである。アトラソフ2墓地の女性の頭骨は、中央アジア・バイカル地方の住人のうち、北アジア系統の人々と形態がとても良く似ている。歯を調べると、東シベリアよりは西シベリアの人々に近い。

これらの墓が示すのは、初期のヤクート人がさまざまな出自の部族に分かれており、決して均質ではなかったことである。ヤクート人は、その後、徐々に一つの民族としてまとまっていくのである。

文献

（ロシア語）

Алексеев А.Н., Дьяконов В.М. Святыище Джампа - новый памятник древних обитателей Ленской

- тайги // Фундаментальные проблемы археологии, антропологии и этнографии Евразии: К 70-летию академика А.П. Деревянко. - Новосибирск: Изд-во ИАЭТ СО РАН, 2013. - С. 460-468.
- Алексеев А.Н., Кочмар Н.Н. Древние святилища Тойон-Арынского историко-культурного района на Средней Лене // Древности Якутии: искусство и материальная культура: Сб. науч. тр. - Новосибирск: Наука, 2006. - С. 56-101.
- Дьяконов В.М. Каменный инвентарь позднего неолита Якутии (по материалам долины Туймаада) // Культурная хронология и другие проблемы в исследованиях древностей востока Азии / Ответ. ред. И.Я. Шевкомуд. - Хабаровск: Хабаровский краевой музей им. Н.И. Гродекова, 2009. - С. 100-120.
- Дьяконов В.М., Афанасьев А.С. Атласовское захоронение - новый памятник кулун-атахской культуры в Центральной Якутии // Традиционные культуры и общества Северной Азии с древнейших времён до современности. - Кемерово: Изд-во КемГУ, 2004. - С. 257-259.
- Кочмар Н.Н. Писаницы Якутии. - Новосибирск: Изд-во ИАЭТ СО РАН, 1994. - 262 с.
- Мочанов Ю.А., Федосеева С.А. Очерки дописменной истории Якутии. Эпоха камня: в 2 томах. - Якутск: ЦААПЧ АН РС (Я), 2013. - Т. 1. - 504 с.
- Мочанов Ю.А., Федосеева С.А., Алексеев А.Н., Козлов В.И., Кочмар Н.Н., Щербакова Н.М. Археологические памятники Якутии. Бассейны Алдана и Олекмы. - Новосибирск: Наука, 1983. - 392 с.
- Окладников А.П. История Якутской АССР. - М.; Л.: Изд-во АН СССР, 1955. - Т. I. - 430 с.
- Шараборин А.К. Раннепалеолитическое Местонахождение Чингалах на средней Лене (Якутия): технико-морфологический анализ // Известия Лаборатории древних технологий. - 2015. - №2 (15). - С. 62-74.
- Эртыков В.И. Усть-мильская культура эпохи бронзы Якутии. - М.: Наука, 1990. - 152 с.

(英語)

- Alekseyev A.N., Zhirkov E.K., Stepanov A.D., Sharaborin A.K., Alekseyeva L.L. Burial of an Ymyiakhtakh warrior in Kyordyughen, Yakutia // Archaeology, Ethnology and Anthropology of Eurasia. - 2006. - 26(1). - Pp. 45-52. DOI: <https://doi.org/10.1134/S1563011006020046>
- Bagashev A.N., Razhev D.I., Zubova A.V., Bravina R.I., Dyakonov V.M., Stepanov A.D., Kuzmin Y.V., Hodgins G.W.L. A Medieval Yakut Burial Near Lake Atlasovskoye of the 14th-15th Centuries: An Anthropological Study // Archaeology, Ethnology and Anthropology of Eurasia. - 2016. - 44 (2). - Pp. 137-147. DOI: <https://doi.org/10.17746/1563-0110.2016.44.2.137-147>
- Bravina R.I., D'iakonov V.M., Bagashev A.N., Razhev D.I., Poshekhonova O.E., Slepchenko S.M., Alekseeva E. A., Kuz'min Ia. V., Hodgins G. W. L. Early Yakut Burials of the Fourteenth-Seventeenth Centuries: New Data to the Problem of the Origin of the Yakuts (Sakha) // Anthropology & Archaeology of Eurasia. - 2016. - Vol. 55, nos. 3-4. - Pp. 232-268. DOI: <https://doi.org/10.1080/10611959.2016.1317534>
- Dyakonov V.M. Ceramics of the Ulakhan Segelennyakh Culture, Early Bronze Age, Yakutia // Archaeology Ethnology and Anthropology of Eurasia. - 2012. - 40(4). - Pp. 106-115.
- Gómez Coutouly Y.A. Industries lithiques à composante lamellaire par pression du Nord Pacifique

de la fin du Pléistocène au début de l'Holocène: de la diffusion d'une technique en Extrême-Orient au peuplement initial du Nouveau Monde: Thèse de doctorat en préhistoire. - Nanterre, 2011. - 631 p. (in French).

Stepanov A.D. Early Iron Age Dyupsya Burial, Central Yakutia // Archaeology, Ethnology and Anthropology of Eurasia. - 2010. - 38 (1). - Pp. 32-36.

Waters, M., Forman, S.L. Pierson, J.M. Diring Yuriakh: A Lower Paleolithic Site in Central Siberia // Science / - 1997. - 275(5304). - Pp. 1281-1284. DOI: 10.1126/science.275.5304.1281

付記

「シベリア大陸東北部にあるヤクーツクは、旧石器時代研究者に限らず、日本列島の先史時代研究者にとって、一度は訪れてみたい“あこがれ”の地である」(佐藤宏之 2007「聖地巡礼—ジュクタイ洞窟とディリング・ユリャフ—」『第8回北アジア調査研究報告会』: 19-22、北アジア調査研究報告会実行委員会)。本稿は、そんなヤクーチアの考古学の到達点をかみくだいて解説していただいた、ヴィクトル・ミハイロヴィッチ・ジャコノフさんの講演記録である。講演は、同じ内容で東大(2019年3月21日)および北大(2019年3月26日)で実施し、計30名の方々の来場をえた。

1976年生まれのジャコノフさんは、ロシア連邦サハ共和国(ヤクーチア)のロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方先住民研究所の研究員である。ヤクーツクの北東連邦大学で考古学を専攻したのち、ロシア科学アカデミーシベリア支部(ノヴォシビルスク)で博士候補となった。これまで、とくに新石器時代～青銅器時代の土器編年や長距離交易に関する研究で大きな成果をあげてきており、いまヤクーチアでもっともアクティブに活躍している考古学研究者の一人である。

2007年に、東京大学の犬貫静夫さん、佐藤宏之さん、高橋健さん、福田がヤクーチアを訪問した際、ヤクーチア考古学の泰斗であり、当時、北東連邦大学の学長でもあったアナトリー・ニコラエヴィッチ・アレクセーエフさんが受け入れてくれた。このときにジャコノフさんも日本からの考古学研究者との交流に加わっており、福田はその後ロシア・アルタイで開催された学会などにおいてジャコノフさんとの再会を喜ぶ機会もあった。

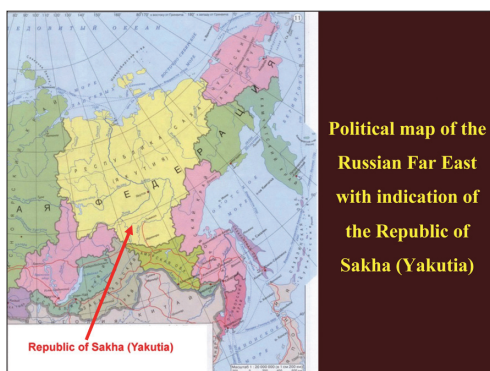
いっぽう、高瀬は2015年に北海道大学北極域研究センターが国立極地研究所・海洋研究開発機構とともに実施する北極圏にかかわる研究プロジェクト ArCS の一環として、北極圏での研究開始を模索していた。当時、人文学・北方先住民研究所所長を務められていたのもアレクセーエフさんであり、送った手紙にすぐに返事をいただき共同研究を開始することとなった。それ以来、毎年ヤクーツクを訪問し、ジャコノフさんと共同で土器や石器の分析を進めるとともに、北極圏でのフィールドワークも行っている。

こうした交流をへて、2019年3月に日本の研究者のあいだでも関心が高いヤクーチアの考古学について最新の情報を提供してもらうことと、ヤクーチアと日本の考古学の研究交流をさらに活発化させるきっかけ作りを目的として、ジャコノフさんを招聘した次第である。これまでヤクーチアに足を運びたいと思っていたがなかなか実行に移せなかった日本の研究者が、今回の招聘を機にできた接点をきっかけとして早速ヤクーツクを訪問するためのプランを練ったり、自分自身の研究フィールドをヤクーチアにも拡大したいと考えたりする人が出てきており、はやくも効果があがりつつあることを実感している。今後、ヤクーチアにおける日本との共同研究がさらに充実してゆくことを願っている。

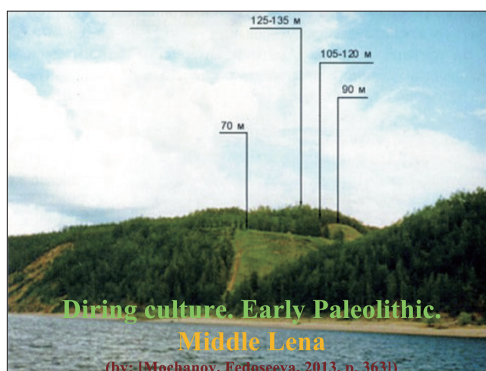
講演では150枚以上のスライドを提示いただいたが、本稿にはスペースや諸権利の制約により、

論旨の理解にとって最低限のものしか掲載できなかったことをお詫びする。また、ジャコノフさんには、フィールド調査で忙しいシーズンに掲載可能なスライドの確認に奔走していただき、感謝申し上げます。最後に、講演会および本講演記録の翻訳でお世話になった垣内あとさんに心よりお礼申し上げます。本稿は、科研費・基盤研究 A (15H01899) (研究代表者・高瀬克範)、科研費・基盤研究 B (18H00739) (研究代表者：福田正宏) による事業の一部である。

(高瀬克範・福田正宏)



スライド 1



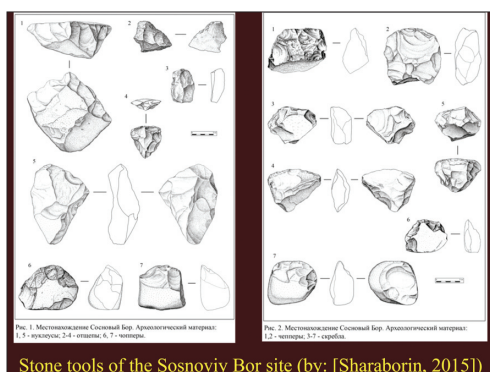
スライド 2



スライド 3



スライド 4



スライド 5



スライド 6



Stone tools of the Mungkharyma I site

スライド 7



Stone tools of the Ust-Chirkuo site

スライド 8



Stone tools of the Dyuktai culture. Bifaces

スライド 9



Wedge-shaped core. Dyuktai culture

スライド 10



Stone cores of the Sumnagin culture

スライド 11

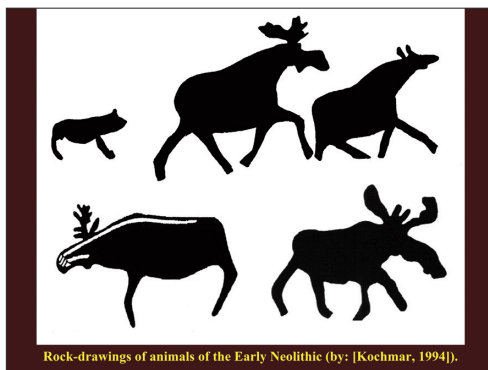


Syalakh culture. Fragments of ceramic vessels

スライド 12



スライド 13



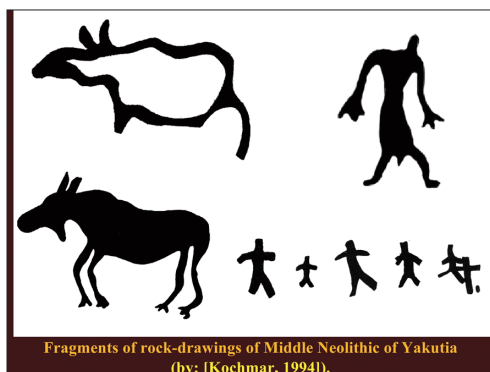
スライド 14



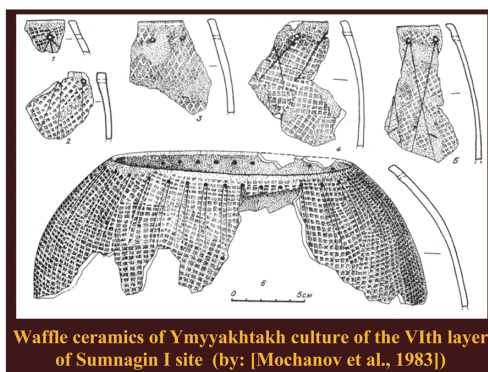
スライド 15



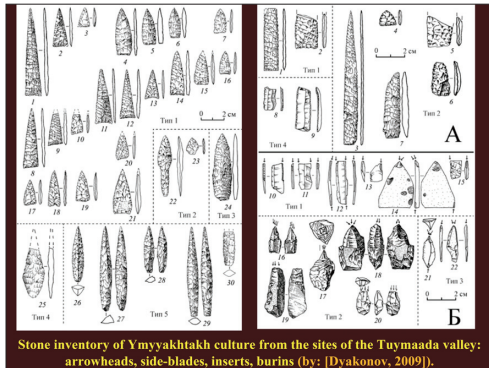
スライド 16



スライド 17



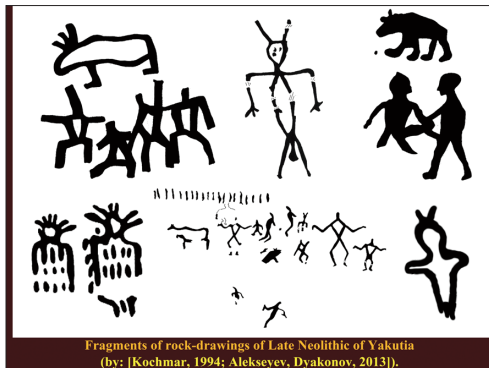
スライド 18



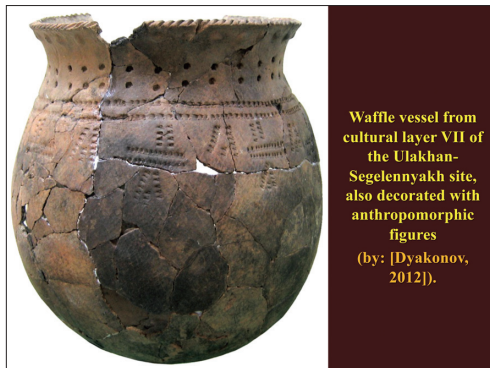
スライド 19



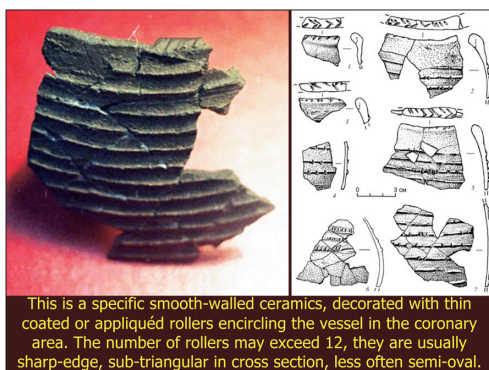
スライド 20



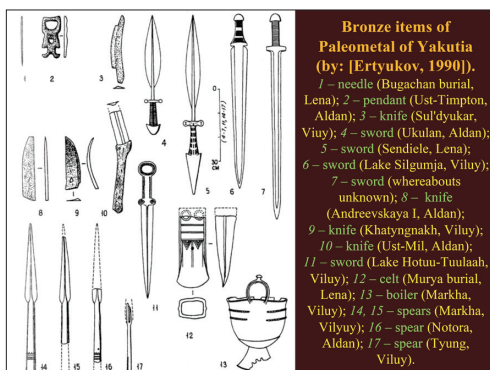
スライド 21



スライド 22



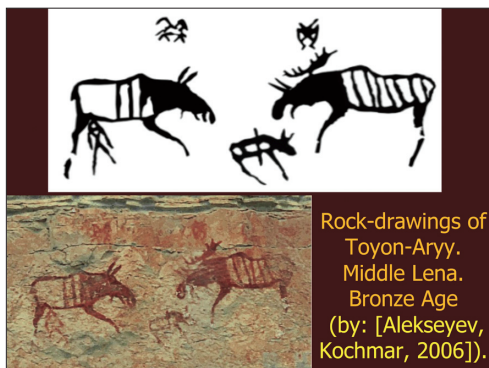
スライド 23



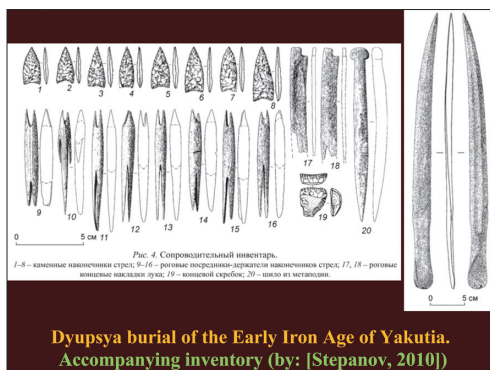
スライド 24



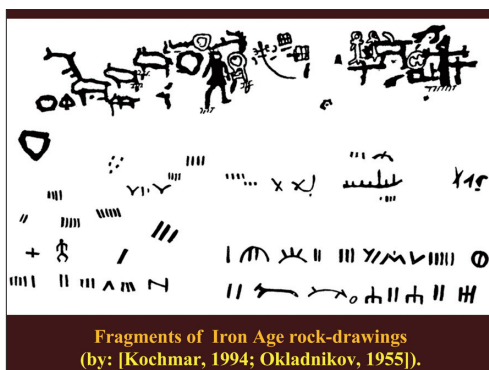
スライド 25



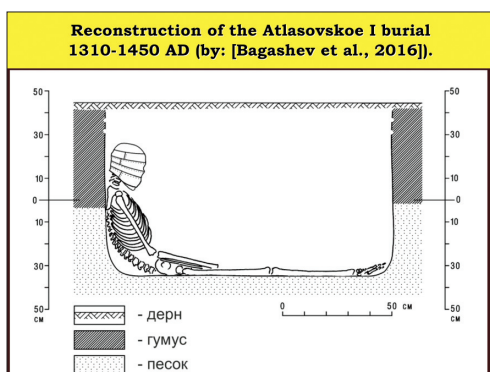
スライド 26



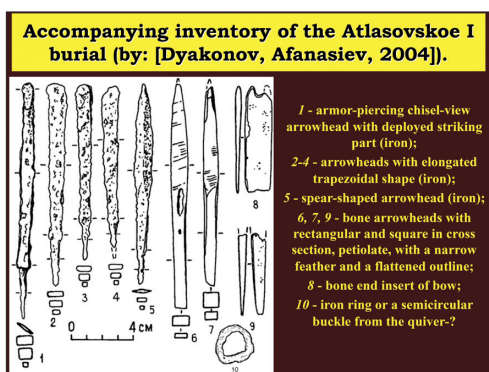
スライド 27



スライド 28



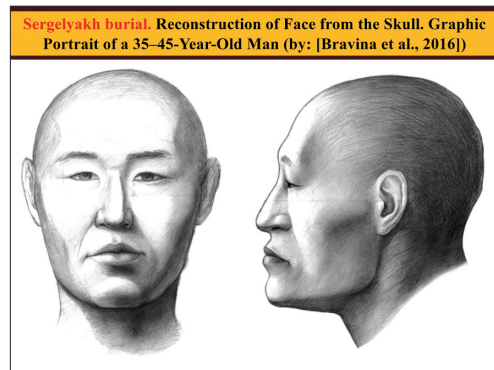
スライド 29



スライド 30



スライド 31



スライド 32

